

視藥 霞報 中 通油町 鶴喜板



烟丸 秘 桂の 存義

馬琴作

西垣文庫

文庫10

6759

65

60

55

50



あづま家の出茶

棟梁軒大九郎製
御作料一口三匁

あづま家の先祖は深の
乃儀平が先祖深の
番匠聖徳太子の告
せらるるけりて製
とらるるの儀に
規矩準繩乃工
夫のりんくあづま
製はしつひの挽
まりの好ひはげり
扱ふも乃散茶と
かりつらの移り
茶ととらひ中一
天井のりんくあ
てたる茶のさし



と懸く茶の穂
をせりてさるる
乃のらぬ白くひ
まね板のぞく
する大らぬあづま
りしとらるる茶
根のあまけりし
さるる乃不
茶のりんくあ
のりんくあ
もあづまのりんく
どかとはさるる
さるる茶のりんく
土其さるるひ
他霞さるる



大工さるる
やうにさるる
おれさるる
さるる
なつさるる
あづま



本家 瀬川 神仙路考油

目ざし大極上吉の
一枚看板出置の
十包入一箱付給金千両

一袋一斗ふれしらぬ向く
こうせんとささるるれを
一巾ふき平ふぬけも月
心梅とまらぬふ
御のまじりし事
ぬまう不作れかり
ふと力し人つひ
あり付くともあは
ふりあり
右路考油は儀はま
のはれし事なりぬ
あては様小用ゆる
人八年うすし



此の油は
府向し
ふと力し
ぬまう
わりの
おりの
ふと力し
人つひ

かんたんにゆらんふに
10分神位の名あり
先者一徳しとあり
おのれは
を氣と有り
ど女ある神乃
雨の目し老るけを
うけどむらんぬ奇
汁はあられ何はらぬの
ぞくぬけししひの
ゆらん事石橋末
ふせんのかしつひり
とさまうたぬらんぬ
たりもらん其功その
妙うしつ西
用ひく後
志れへ

野川製薬



おまんの
おのれは
かゝる人

此の油は
府向し
ふと力し
ぬまう
わりの
おりの
ふと力し
人つひ



唯 一 太 太 香

日本一社 勢州山田氏製

此の香は神祕不思議の良けありて世のあつたるもの寄持あり一月二百粒三百粒づりゆきとバげごうひはとらひく幸とひえと積ひと積ひと積ひと積ひと家財はひひひすこやふしてを病也積く位はして用也下奉納のけくかえ



この香はたいくまらしてつちやア



一子 徳 摠領

あ ん ぼ ん 丹

本家 摠領 甚六 代料 百の口十六丈拔

めぢのさうやまゝに
しかのまゝに
ゆのいれを
あつたるもの寄持あり
一月二百粒三百粒
づりゆきとバげごうひは
とらひく幸とひえ
と積ひと積ひと積ひと積ひと
家財はひひひすこやふして
を病也積く位はして用也
下奉納のけくかえ



あつたるもの寄持あり
一月二百粒三百粒
づりゆきとバげごうひは
とらひく幸とひえ
と積ひと積ひと積ひと積ひと
家財はひひひすこやふして
を病也積く位はして用也
下奉納のけくかえ



大盡空見うらまひ茶

本家

阿軒

法

此より用ひすの
 緒うら氣乃の
 どのひすてなきふ
 わつ成らんく静
 常あむ志むをけ
 子をれくめあて
 常あ言とれた
 穿一のの紫とけ
 きげせれこを
 ちんあくくあ
 ちんと物一のい
 けか毛とらぢぢ



物さぬわい
 こくといま
 ハ又ん乃ぢぢ
 やくあぢぢ
 ねんむ羽ゆま
 ねんむの又かん
 さうれ首尾
 をあぢぢ
 いんもん不
 の不食とほ
 べのあ
 らうと
 思かり



おの
 ひの
 きん
 ほん
 テ
 テ
 テ

おの
 ひの
 きん
 ほん
 テ
 テ
 テ
 テ
 テ
 テ
 テ



オイラシタ

内股膏藥

弘所北門三浦

高尾氏



前より御扱
仕仕しつらん
殿とも楽ら儀
ヲクニテと申
御方受授の
きせりせり
相傳の御業
茶いす儀
そのつらら
ごしつわら
とららら
すうはい

おのの
おのの
おのの
おのの
おのの

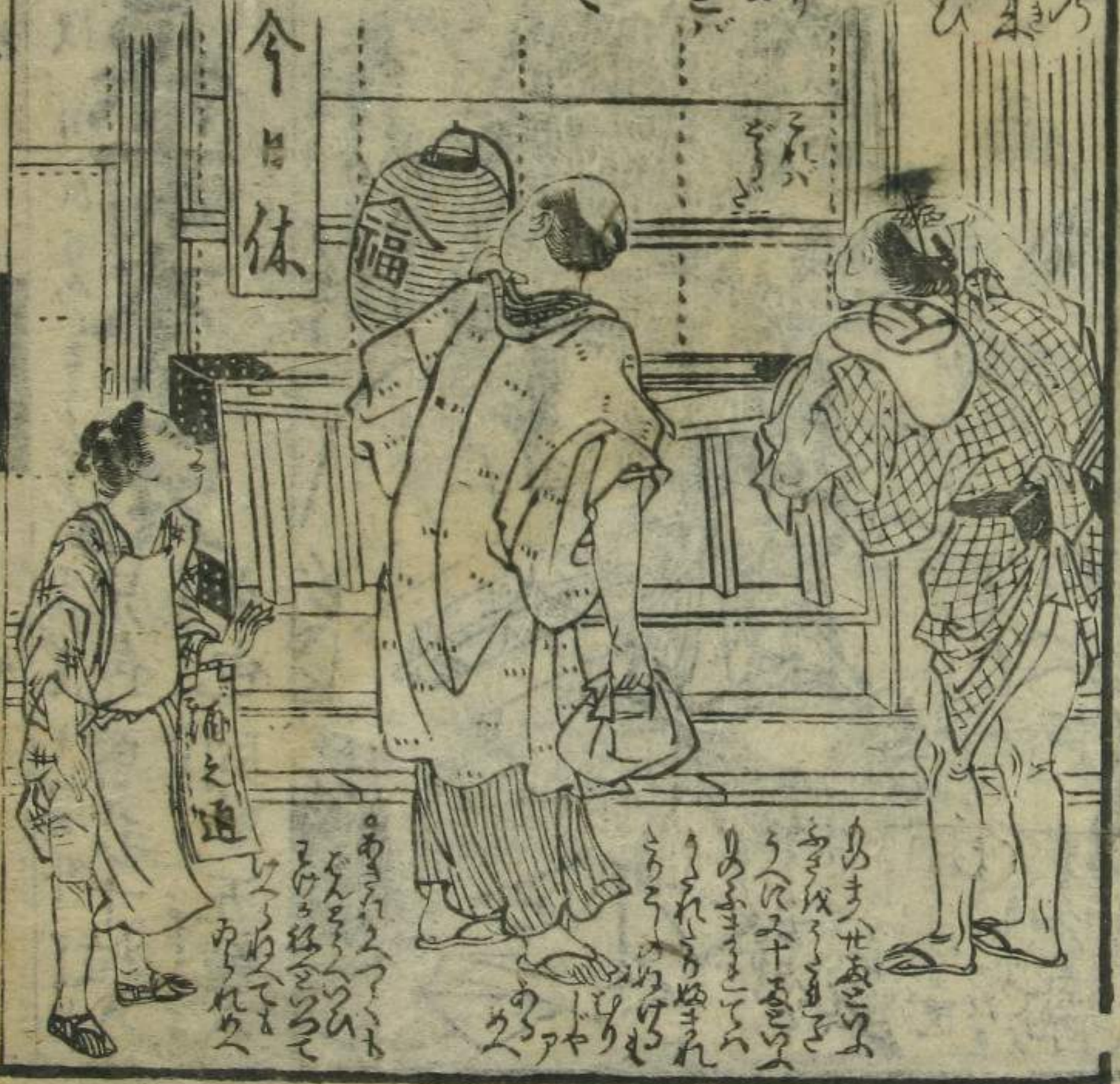


おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの

おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの
おのの

九代世は後い
ぼつう八百のふさだ
つゝあまのまのけ
新んくすもあまの
ことごとく同屋の古
積と母とめんと
すれおそののけ
あまのけ
あまのけ
あまのけ

あまのけとく
あまのけとく
あまのけとく
あまのけとく
あまのけとく
あまのけとく
あまのけとく
あまのけとく
あまのけとく
あまのけとく



金
ぼつう八百のふさだ
つゝあまのまのけ
新んくすもあまの
ことごとく同屋の古
積と母とめんと
すれおそののけ
あまのけ
あまのけ
あまのけ

物前出町
鎗栗屋幸五郎



胃保痢木瓜丸

兄弟包曾我十粒入
弟包同五粒入



右いかに本丸丸
弟我大時神乃
神化すもく
毎朝雲の月
三芝居も
弘中ひ
池田九
伊方山出
かなさ終へん
心込るく一坊
十六より箱入
田根最二十八まを

かゝる方と
かゝる方と
かゝる方と
かゝる方と
かゝる方と
かゝる方と
かゝる方と
かゝる方と
かゝる方と
かゝる方と



こまありひけ
出たるまの
伊方の山出
おまの神
おん附言
弟志人上仕
世とるんせ
弟と奉公
さつりなく見物
一目めてお
中いひま
けん久仕
おのの先
弟換めん
おのらち
あまはく世
望らひる
あまの

兄弟包
弟包
曾我
十粒入
五粒入



精性朝間看經丹

壹劑
煩惱百八銅

引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木

引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木



引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木

引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木
引木



免小見きほ丸

吉市川三井通
藝の上町
弘所 萬屋介六

作きり丸の切替ハ
會一由は乃血の切
そりあうせぬらうと
おしりりりのあなぬら
けん今このころをとり
出入りのあなぬら
ねさるい後肉の
よりのこのと
たまけてあく
體とてをちあは
のふん又あ同やと
りらゆきハ使者の
あのごとをハくられ
末神の



てんを散るむ
さうの海味を
加古川幸草不
のもしる處乃
茶屋成
九段目語町
ゆくとまんとく
あまふん製
舟一尺八の糸
と出ると香
よりのむの
ゆくとまんとく
まふあまふん



天蓋散

おむすろ茶

忠臣藏通

九段目語町
竹田出雲掾製



いかにきか
いかにきか
いかにきか
いかにきか
いかにきか
いかにきか
いかにきか
いかにきか
いかにきか
いかにきか



おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶

おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶
おむすろ茶

百韻

俳諧とせと膏藥

弘所

本家

荒木田守武制

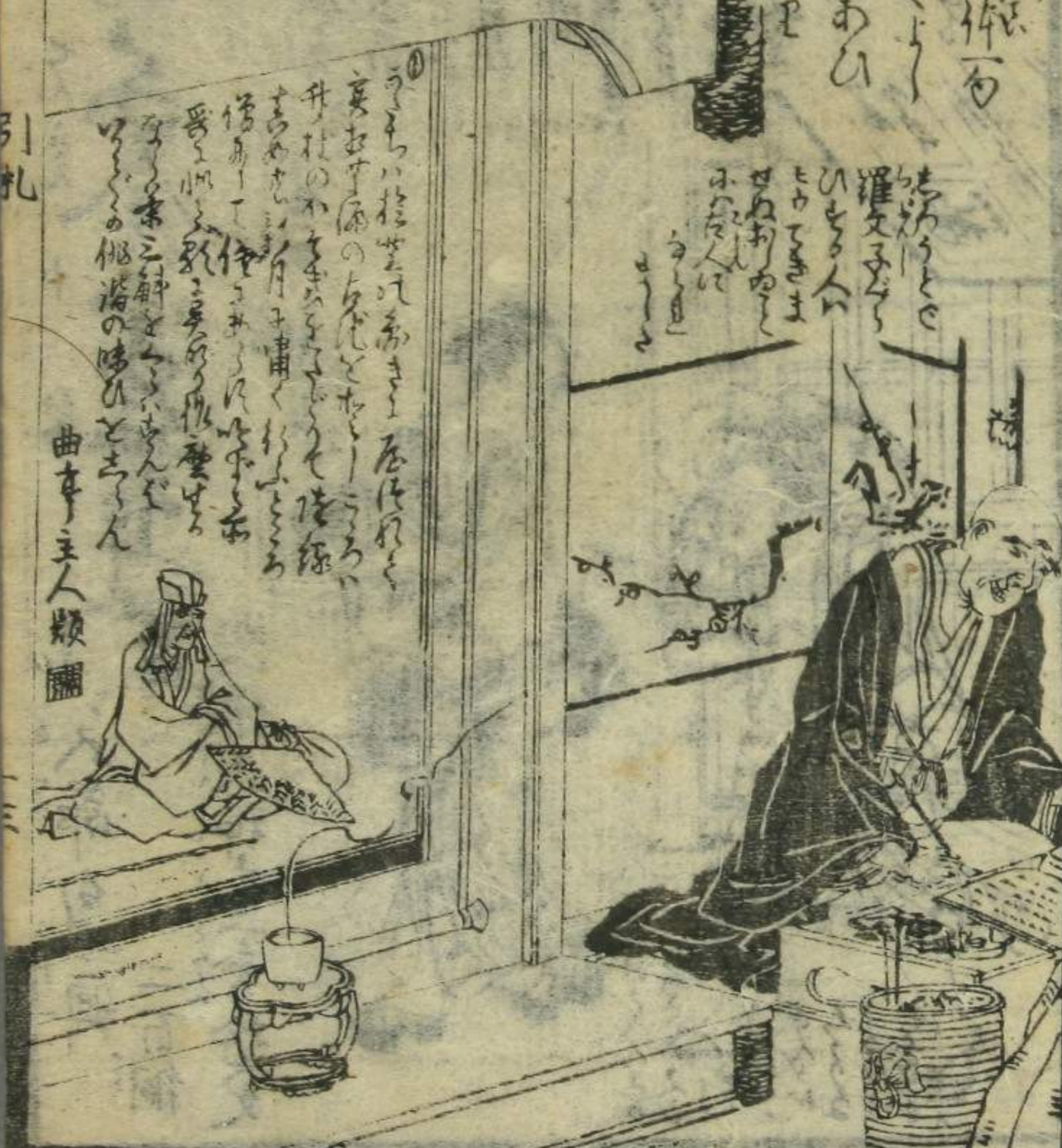
芭蕉庵挑青調合

心も休らう茶の飲む巻
 百韻より出づるの身仕
 三十一句神七調名
 色々の中附まされの節二
 白のつらう對一應のさる
 今くの伊をけしう、家より
 此方めて言魚也と云んぬ
 此茶う合基はるる成
 一四季六句去ては
 一居不水辺の敷う人の
 三句さうてしう
 一生類三句入る白れる



いびり
 一判柴火作ら
 ぬを捨てしう
 け外さしあひ
 けささあは

志のうとて
 羅文ふた
 ひもる人い
 上かてま
 口ぬおめ
 小い人い
 白り



うらわに松葉のあまきし居任せ
 夏おす雨の女はとわしうらわ
 井の杜のわさきをささうらわ
 さあめをいし月子浦くはさうらわ
 借ありて伊さきしはさうらわ
 受し心と歌さあはるる松葉
 さうらわ茶三軒とさうらわ
 さうらわの松葉のつらうらわ

曲本主人類

引札



子金文字集

せんきん

八節句一週

二百銅

附薬天神香一會拾文

せんきん

小児七八歳より
二月より午に
とくせんくのみ
ふとく成用ひ
三又年がわが
たふと眩用すま
扱のづゝはさて
わさうふあり
て甲うみ文字
を製まけ
生に成あり
めらうとあり
うもひなり



せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん

世々
ゆれ
乃
て
口
と
な
後
ふ
け
い
た
形
い
ま



せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん
せんきん

曲亭馬琴作 

忠臣蔵の長巻乃良法ありたるは
 此の世にまはるるもの地を
 忠臣蔵の長巻乃良法ありたるは
 此の世にまはるるもの地を
 忠臣蔵の長巻乃良法ありたるは
 此の世にまはるるもの地を



山東京傳子著

忠臣水滸傳前編

此冊子ハ太平記小もしげき水滸傳
 あり成る所也地治る貞智の得失
 兼括とありろく出たり

全部五冊當年出来賣出
 中より一冊のな履めて水
 滸傳

同後編 全部五巻 未春出来

これハ七後目より十一目まで
 此後のおりむこと五回小
 巻なり共小水滸傳にあり

尊氏勳勉記 全五冊
 北尾政美筆
 楠二代軍記 全五冊
 北尾政美筆

曲亭馬琴子作 哥川豊國画
 役者名所園會

芝居のすす役者のひきり
 芝居のすす役者のひきり
 芝居のすす役者のひきり

より一冊の繪入本三冊
 出来賣いどーやい

早稲田大学図書館

011688985970